

1

私が生まれた頃、ベトナム反戦の世論が公害反対運動や住民自治の発展などと結びつき、世の中は変革モードが続いていた。仮面ライダーやウルトラマンを模倣して遊ぶ幼児時代の横浜のアパートには、仲良しの子のおかあさんが夜の商売にかける前の化粧をしながら私たちに微笑んだり、近くの工場の作業員が通りかかったりした。バスや電車や市電で繁華街に出ると、商店街や映画館通りやネオン街、港などの賑わう雑踏に、社会が変わっていく予感のような若い雰囲気があったことを記憶している。

あのひとりひとりの人たちはいまも生きているだろうか。変わっていくまちを歩くと、ふと、失われた風景のその中の人たちの存在が親しく、懐かしい。

戦中戦後に生まれた世代や団塊の世代の人たちと違って、私たち一九六〇年代終わりから七〇年代はじめ以降に生まれた世代には、社会的に大きな何かを共にしたという共有意識がない。まじめに学んで社会に出ても、バブル崩壊や福祉切り崩し、教育の荒廃や労働条件の悪化、自己責任論の風潮などによって、「先進国」とはお世辞にも言えない状況の渦の中でぐちゃぐちゃになったまま、バラバラになったまま、明るい展望が見えにくい時代を生きてきた。

今の若い人たちはもつと気の毒な状況にある。

だが、屈折と模索の現代だからこそ、まじめに世の中のことを考える若者たちが多くいて、たとえば派遣労働者の劣悪な状況を変えるために連帯行動をしたり、沖縄の苦しみやコリアの人々の大変な歴史的苦悩を学ぶ中で世界市民的な行動を開始する人たちなどがいる。毎年続けられてきたヒロシマ・ナガサキからの平和運動を若い力が引き継いで盛り上げている話

も聞く。年間三万人にも及ぶ自殺という事態を受けて、経済的な原因とともに重くのしかかっているコミュニケーションの社会的精神的危機の問題にとりくんでいる人たちもいる。

形態は変わったが、ここには本質的なところで引き継がれてきたものを見ることができよう。

私は昨年夏、ボードレルやアポリネールやツアラやブルトンやアラゴンやユーゴーやロートレアモンやエリュアールやネルヴァルやランボーやヴェルレーヌやプレヴェールなどの詩文学を追いかけて久しぶりにパリなどフランスを歩いた。エッフェル塔の近くの広場で、フランスの若者たちがヒロシマ・ナガサキの写真を展示して反核反戦の署名活動をしていて、チャーミングなマドモアゼルの連帯の笑顔に励まされた。

世界では、やっぱり今も、連帯行動は時代遅れじゃないと実感され、勇気をあらたにした。

戦争・平和にしても、自殺・こころの問題にしても、あるいは医療問題、高齢者の皆さんが抱える諸問題にしても、私たちのこの時代、この社会、この世界で、究極のキーワードは「命」だろう。それは「生と死」の問題であり、限られた人生の重みと他者との関係性の問題でもある。

2

人は必ず死ぬ。人が愛する他動物も必ず死ぬ。人の周りのものも古くなる。宇宙の時空で、地球自体が四十六億年前に生まれたばかりであり、他の星と同じように、遠い将来（であることを願う）、「死ぬ」運命にある。その地球の時間には氷河期もあって、ヒトの遠い祖先は幸運にもDNAを受け継ぐことができて、現代にいたっているのだ。肌の色はさまざまで、しゃべる言葉もさまざまで、生活習慣もさまざまで、国籍もさまざまだが、私たちは皆ホモサピエンスなのである。それぞれ大切な数十年間（あるいは幸運ならば百歳以上）の人生を生きる者同士なのである。それぞれ

そう考えると、ありきたりの言い方にはなるが、いま生きているということは奇跡のような話である。

紀元前の中国で絶大な権力を手にした秦の始皇帝が、不老不死の薬を求めて徐福という人に探させたという話は、日本への徐福渡来と地元の娘との悲恋「徐福伝説」となって、佐賀県など各地に伝わっている。国家権力のトップに立つても叶えられない不老不死。それも印象的であるが、それよりもむしろ、外国高官である徐福さんとの叶わぬ恋に絶望して身投げしたとも伝えられる村の娘・お辰の伝説をしのんで、小さな「お辰観音」をつくって縁結びの神様になっている人々のところに私は感銘を受ける。まさにそれが、鎮魂の思いである。

叶わぬ恋といえは、近現代の日本軍国主義や欧米列強の植民地支配や侵略戦争の犠牲になった男女の恋も悲しい。今年は日本による罪深い「韓国併合」百年である。いま日韓の国際結婚も増え、日本人の韓国人への敬意もすっかりとしてきて、文化交流・友好もずいぶんすすんできたが、戦後もついひと昔前までは、たとえば自分の子が在日コリアンと結婚することに偏見的に反対する親も多かったと聞く。ましてや、日本全体が「神の国」のオカルト的狀況だった戦前には、きつと無数の男女が「叶わぬ恋」に悲しんだことだろう。同じ日本人の間でも、侵略戦争に反対する当時の勇気ある人々を「アカ」として逮捕・拷問死させた世の中で、思想的に引き裂かれたカップルも少なくなかったであろう。

もつと身近なところでは、たとえば、幼児が仲良くしていた犬を亡くした時などに見せる人生初の驚愕などもせつないものだ。冷たくなっていく遺体を前に、どう受けとめていいかわからず、話しかけ続けたり、茫然とするばかりのその光景は、チンパンジーやゴリラなどの母親が死んでしまった我が子をいつまでも大事そうに背負ったりする目撃談とも共通するものがあるし、新しいひとの死体を丁寧に埋葬してきた古来世界各文化に共通する心の本質かもしれない。

3

死。この無念。この矛盾。

しかし、ここに、「文学」というものの根源があるのだ。引き裂かれたもの、失われたもの、確かにあったもの、これから生かすべきもの。過去から現在を通じて未来へと、こころをつなぐもの。人から人へ、一対一の「書物」という場で、人の心は豊かになった。いい本を読むと、人生が二倍にも三倍にもなる。小説もいい、戯曲もいい、エッセイもいい。その中で、心と心がダイレクトに交信する「詩」は特にいい。

『万葉集』。古代、たとえば、貧しいながらも妻と愛し合って生きる東国の農民のもとに「防人に行け」との国家命令が来る。飛行機も新幹線もない。時に舟にも乗るが、ほとんどの行程は歩きである。道も整っていないけれども道をはるばる九州北部まで、辿り着けずに野垂れ死ぬものもいた。やっと任地に着いても、平均寿命の短かった当時、数年後に遠い妻や子のもとに帰れる可能性は高くない。そんな名もない人たちの絶唱を『万葉集』で私が通読したのは一九九〇年代。作者たちの時代からおそろしく長い歳月が経っているのに、自分のことのように深く感動したのだから、詩歌のもつ力は底知れない。

『万葉集』には「挽歌」の名作も多く収録されている。

4

柿本人麻呂の妻を悼む長歌と短歌をその代表として今回のこの『鎮魂詩集』の巻頭に掲載することができてうれしい。

というわけで、ここに歴史的アンソロジー『鎮魂詩四〇四人集』をお届けする。

二十一世紀初頭の現在まで、「死」の直視から生まれる詩は無数に書かれてきた。戦争の死者たちと生き残った者たちの歴史的・社会的・個人的な命の声。あるいは、家族や友人や自然風土の中の小動物など生活の場に響く鎮魂の思い。さらには強度の批判精神が俯瞰させる文明と地球環境の未来警告的鎮魂詩。

今回、近現代の物語詩人の名詩をかなり収録した。石垣りんもいれば小熊秀雄もいる。河邨文一郎、更科源蔵、中原中也、黒田三郎、木島始、宮沢賢治、壺井繁治、丸山薫、宗左近、小野十三郎、浜田知章、鳴海英吉、峠三吉、原民喜、栗原貞子、三好達治、大島博光、金子みすゞ、伊東静雄、福中都生子、高村光太郎、草野心平、濱口國雄、高見順、犬塚堯、嵯峨信之、

村野四郎、萩原朔太郎、永瀬清子、村上昭夫、山田かん、白鳥省吾、錦米次郎、竹内浩三、藤田文江、桃谷谷子、福田万里子、金丸榊一、笹沢美明、木下夕爾、会田綱雄、米田栄作、千葉龍、藤原定、ブレヒト、などなど。

そうそうたる名詩人であるが、鎮魂詩という内容でこうして掲載してみると、新鮮な感銘を覚える。どの時代の詩人にとっても、「死と生」は常に意識せざるをえない人生の大切なテーマだったことがわかり、人間的な親しみを覚えるのだ。

このような貴重な詩歌遺産と並ぶ形で、現実と立ち向かっているさまざまな世代の現役詩人たちの作品が収録されているのも、死者と生者の願いの共同として、独自の光を放っていると言えるのではないか。

強力な翻訳者たちのご案内で、海外の詩人の作品もかなり収録することができた。

延べ人数四一四名、実数四〇四名、作品数四九六篇、というとてもないスケールの本となったが、現役参加者の顔ぶれを見ると、画期的な共同が感じられる。日頃、別々のところで詩を書いてきた者同士が珍しい組み合わせで広範囲にここに集まっているのである。コールサック社からのアンソロジー詩集は『原爆詩一八一人集』『生活語詩二七六八集』『大空襲三一〇人詩集』に続いてこれが四冊目であるが、今回が初めての詩人が多いということも特徴の一つである。

その中には、長くそれぞれの持ち場で書いてこられた方もいれば、最近めきめきとその才能が目ざされている若い方々もいる。現役詩人の略歴欄はアンソロジー全体の簡素な形の規定によって、著書は計二冊まで、所属は計二つまでに限らせていただいたのだが、その中にも、全国各地の同人誌・サークル誌・個人誌、月刊・季刊などの全国詩誌、都道府県規模の詩団体や地方を網羅した詩団体、全国詩団体や文芸団体など、この国の水面下で地道に続けてこられた貴重な詩文学運動の一端を見ることができよう。また、詩誌や団体とは違うところで独自に書いてこられた貴重な方々の詩世界も反映している。

多様な個性が「鎮魂」という広いテーマでこうして集まっているのだから、この本には今の日本の詩の世界の様子を知る参考資料としての意義もあると思う。

これには命を軽視する危うい時代という社会状況も反映しているが、それだけではなく、戦前・戦後の熱心な詩運動と激論を経て、地球の存続までもが世界的な議論対象となっているこの二十一世紀に、詩の考えや手法・傾向、政治上の考えなどの違う者同士が、可能などころでは気持ちの良い詩運動の共同を積極的にすすめるという形が求められていることの表れ

ではないかとも考えるのである。

特に、新しい書き手や読み手、若い人たちとのつながりをつくっていくことが現代詩の世界にも求められていることを考えると、各人が狭い所属意識で既成の枠の中だけで詩運動をすすめていては、他ジャンルにくらべてただでさえ詩が軽視されているこの国の文化状況のもとで、せっかくな詩がどこかで生まれても、それが皆の共通認識にならないのである。だから、詩人は創作の面ではおおいに各自のこだわりを大切にしながら、詩世界全体の発展・交流・普及の上では共同すべき時代に来ているのである。私は近年いろいろな場ですつとそういう提言をしてきた。

そうした方向性の実践的な好例をこの本が提供しているとしたら、これがいい刺激になって、日本とアジアと世界の詩の世界がいつそう豊かに盛り上がることを切に願うものである。

5

「鎮魂」というと、かつての軍国主義と結びついたものを連想して警戒する方も多いようだ。しかし、この本の趣旨はその正反対である。死んだ後の「あの世」や「靈魂」を信じるかどうかは個人の大切な自由である。しかし、神や仏を信じるものも、私のように「あの世」を信じない無神論者も、「死んだもの、失われたものを惜しみ、悼む気持ち、故人の遺志を今後に生かす気持ち」に変わりはないと思う。

かつてヨーロッパを放浪していて、時に寂しくなったり疲れた時、私はよくまちのキリスト教会に入った。そこには老婆や青年が同じようにひとりひとり、「何か」（神や自分自身）に向き合って祈っていた。その空間は異邦人の私にとっても親しく、心洗われるひとときであった。

南フランスなどでは、イスラムの人たちに親切にもらった。

東南アジアでは、大陸の野に次々と現れる仏教寺院と、そこにくらす人々の素朴に祈る姿に共感した。日本の古典文学を読んでいても、平均寿命も低く、医療や災害対策も発達していなかった時代に、早く死んでしまった人を「因縁」による次の世への「生まれ変わり」だと解釈しようとした心がよくわかる気がして、その鎮魂的な願いに共感する。

日本の神社というのは、戦争中の国家神道に歪められた不幸があるが、アニミズムや自然崇拜と結びついた原始神道的な本来のあり方は、現世の幸福を肯定する庶民的なものである。私はよく各地の神社境内を歩いてきたが、風に揺れる絵馬の文字を見つめると、人々の小さな、けれども大切な願い・祈りが書かれていて、共感することが多い。

横浜時代にはイランから来た労働者と友だちになったが、彼は古代ペルシアからの伝統であるゾロアスター教の信者で、これからの世界を語り合いながら、彼の世界観を親しく聞いたものだ。

このように、私の個人的な体験を通して、本来、どの信仰も、自分と他者の心の平安を願うものであり、国家や民族の対立で排斥し合う戦争の世界とは違うところにあるはずなのだ。現在、ヒロシマ・ナガサキからの核廃絶運動にも全国のさまざまな宗教者たちが参加している。

この本に収録された詩人の作品には、その本来の祈りの方向性も感じられて、いわば「現代の願いのレジスタンス」として共演している感じも出ているのではないか。

戦争とは何か。国家とは何か。システムとは何か。人類とは何か。歴史が語りかけるものは何か。地球の現状が示すものは何か。

今日、十分な医療を受けられずに亡くなったこどもに号泣するどこかの母親の願いひとつでさえ大きなものはずなのに、今日、福祉を受けられずに亡くなった孤独な高齢者の昨日の夢ひとつでさえ大切なのに、庶民が働いて集めた膨大な額の税金で、私たちのこの社会はどこへ行くのだろうか。

せめて、文学の心は、経済効率優先の強者の論理に染まらずに、古今東西の血の通った矛盾だらけの人間の真摯なもの、心と世界の真実の声を大切にし続けてほしいものだ。

書店から詩の本がこんなにも駆逐されてきたこの国で、あえて私たちは詩というものにこだわり続けたい。ベストセラーのノウハウ本もいけれど、一人でも多くの現代人に、詩の心が届くことを願っている。

6

各方面の交流詩人たちへの直接的な参加よびかけ、詩人紹介、編集補佐、連日ひとつひとつの作品の組版作業、校正・校閲、作者とのやりとりなど、この本を実際につくる中で、私は皆さんの作品をいち早く読ませていただいていた。数々の工程を経てこうして全体が出来上がって、今あらためて通して読んだ。

その感銘は、熱いながらも静かなもので、ちょうどこれを書いている六月に咲くあじさいの花のような印象であった。あじさいの花が私は好きだ。変化していく色のはかない美しさには毒もあり、苦しみ多い人の世の大切なひとひらひとひらの花のようで、華やかさと陰影、さわやかさとさびしさ、鮮やかさとかなしみ、そういう微妙なニュアンスで、いとおいしいものが感じられるのだ。

他者の死に寄り添い、ひとの心の傷に向き合い、命をつぶす巨大なものに健気な願いの力で立ち向かい、失われたものへの尊い畏敬の念をつぶやく心。

悲惨なことばかりが目につく人類であるが、この本を読むと、人の良心というか、奥の方からしほり出すような真摯なもの、抒情と批評精神の真実の声に、しみじみとしつつ、その中にそっと灯っている明かりを感じ取ることができるのだ。

そして、同じ現代を生きる者として私も、ここに表現された長く遠い年月の、重いものを、しっかりと今後に引き継いでいきたいと思う。

親愛なる読者諸氏のご感想はいかがであろうか。

今回参加していただいた方々にも、参加されなかった方々にも、そして各地で何かのご縁でこの本を読んでくださった見知らぬすべての方々に、心から深く感謝御礼申し上げます。

解説2 「良心の呼び声」に呼応する鎮魂詩。

『鎮魂詩四〇四人集』の刊行に寄せて

鈴木比佐雄

1

身近で最も信頼していた人が亡くなった時には、世界の意味が変わったと思われる瞬間がある。私という存在はどこか単独者であるかのように思っているのだが、実は親密な家族や他者たちによって支えられ生かされているのが実体なのだろう。このようなことを考える上で二十世紀初頭に書かれたハイデッガーの『存在と時間』の思索は、私にとって大きなヒントになる。今ここに生きて問いを発する存在（現存在）は、孤立した存在でなく、道具を使用することによって道具を作り出した他者たちと日常的に出会っているのだという。それゆえ現存在は他者に関心を持ち他者と共にある共同存在であり、世界内存在であるのだと考える。そして人間存在の在りかたを実存的にその基盤を『存在と時間 第一編』で分析していく。しかしハイデッガーはそんな道具連関の共同存在を現存在にとって本来的な存在的だとは見なさない。「第二編」では本来的な現存在の在りかたを「死へ臨む存在」として突き詰めていく。「死は、死へ臨む実存的な存在においてのみ存在する」とか、「死とは、現存在がいつもみずから引き受けなくてはならない存在可能性である」とか死を規定して次のように「終末」を生きる現存在を根源的に考察していく。

「現存在は呼ぶ者であるとともに呼びかけられる者でもあるという命題は、ここにいたって、はじめの形式的な空虚さと自明性とをすて去った。良心は、関心の呼び声であることを、みずから打ち明けたのである。呼ぶ者は、現存在——すなわち、おのれの存在可能を案じて被投性（《……の内にするにある》）のなかで不安を覚えている現存在である。呼びかけられる者も、このおなじ現存在——すなわち、ひとごとでない自己の存在可能（《おのれに先立って》）へむかって呼び起こされている現存在である。そしてこの現存在は、この呼びかけによって、世間への類落（配慮されている世界のもとにするにある存在）のなかから呼び起こされたのである。良心の呼び声、すなわち良心そのものは、現存在がその存在の根底において関心であるということ、その存在論的可能条件としてしているのである。」（第二編・第五七節、細谷貞雄、亀井裕、船橋弘の共訳、理想社）

私は多くの詩人たちの鎮魂詩を読む際に、詩人たちの詩的精神から溢れてくる詩的言語の中に、ハイデッガーの考察しようとした、様々な今ここに生きる存在者の「良心の呼び声」を聴く思いがしていた。自らの死を自覚するからこそ他者の不安や死への無念さに共感して、直観的に「良心の呼び声」となって他者を悼む思いがわきあがる。死の不意打ちによって自己の共同存在の一部がもぎ取られてしまう心境を拭い去りながら、多くの詩人たちは自己の有限な生きる時間を死者の遺志を生かすために、生の力に変換させようと試みるのだろう。私も他者も命あるものたちは、有限な時間しか生きられない「死へ臨む存在」であり、親しい他者たちも、それを免れないことは分かっているにもかかわらず、人はその他者の無限の命を願ってしまう存在なのだろうか。他者との永遠に続く親密な関係を願ってしまう身勝手な精神構造をもった存在なのだろうか。不意打ちをくらった存在者たちは、断ち切られた現実的關係の疼きを抱えながら、死者たちの魂との新たな精神的な関係を築いていくしかすべはないだろう。その死者たちの魂と「良心の呼び声」との対話の形が鎮魂詩であるのかもしれない。きつと死者たちによって生者である存在者は、新たな共同存在として生かされ、生きようとするのだろう。

詩文学において鎮魂詩とは何かという問いに答える試みが、この詩選集の課題に違いない。またその柿本人麻呂から始まる四〇四人の詩的な試みがどのようなものであったかは、読み手に手渡された課題でもある。鎮魂は、家族や他者の魂を鎮めぬぶことであったが、実は逆に死者たちから生者たちの魂は、現世の多様な欲望を断念させられて、本来的なものを見詰めさせられ、その過剰な高ぶりを鎮めさせられるのではないか。鎮魂とは、今ここに実存している存在者が、多くの死者たちから見詰められていることを自覚して、悲哀をこらえてより良く生きようとする試みであり、世俗の名譽や欲望を断念させられ、生をリセットさせられる瞬間なのかも知れない。つまり今ここに生きる存在者が過去・現在・未来の時間を生き直そうとして、その複雑に重なり合った深層の世界に没入し、生と死や有と無などの存在論的な問いそのものが立ち現れてくる。これが、鎮魂詩の隠された意味だと私には思えてくる。そうであるからこそこのような膨大な鎮魂詩が書かれてきたし、これからも書き継がれていくのだと考えられる。そんな意味で、詩人たちの潜在的な試みを明るみだすことがこの詩選集の試みであり、またその試みを詩に馴染みのない未知の読者たちにも届けたいと編者たちは願っている。

万葉集時代から多くの挽歌などの鎮魂詩が書かれ、今も多くの現役詩人たちが鎮魂詩を書き継いで来た。そんな鎮魂詩を一冊のアンソロジーにまとめることが可能ではないかと私は心密かに考えてきた。今回、私以外の編者である長津功三良、山本十四尾、菊田守たちの協力と多くの支援者の力を結集して『鎮魂詩四〇四人集』がまとめられた。その成立過程を記してみた。

『鎮魂詩四〇四人集』がどのような経緯で成立したのかを語るには、この詩選集を公募した際の刊行趣意書を読んでもらうのが分かりやすいと思われるので、全文引用してみる。

刊行趣意書は「コールサック」六十四号（二〇〇九年八月）に収録されると同時に、またこの呼びかけ文と参加の詳細と承諾書が合わさった別紙も挿入されて、参加者を公募した。また「コールサック」六十五号、六十六号、編者の山本十四尾の詩誌「衣」や長津功三良の「竜骨」や「火皿」などを送付する際にも「刊行趣意書・承諾書」を挟み込み、参加者を広く呼びかけた。コールサック編集部の佐相憲一から「詩人会議」「関西詩人協会」会員や、若い書き手へも呼びかけた。さらに菊田守は多くの物故詩人の詩篇を推薦してくれ、最終的に四人の編者の力を結集してこの詩選集は成立することとなった。

『鎮魂詩（レクエム）四〇〇人集』刊行趣意書

死者を悼む鎮魂詩の歴史を後世に伝えるために

二〇一〇年は第二次世界大戦が終わってから六五年目を迎える。二〇〇六年に亡くなった長編詩「炎える母」を書いた宗左近さんは、「二十世紀 戦死者一億七千万 牡丹雪」という句を残している。五月二十五日の東京城北大空襲で宗さんは目の前で母が焼け死に、またや近所の家族も親しい友人も亡くなり、自分だけが生き残った苦悩を生涯問いつけた。宗さんにとって生きるとは、一億七千万人の一人である母や友人や隣人を慰霊することであつたらう。

人はなぜ愛する人が亡くなった後に、その人のことを詩に書き記したいと思うのか。そんな問いを発する時に、私の脳裏に浮かんでくるのは、一九二四年に発行された宮沢賢治『春の修羅』の中の「オホーツク挽歌」の四篇だ。賢治は妹トシ子が病に苦しみながらも気高く死んで行ったことや、白鳥に生まれ変わって「あんなにかなしく啼きながら／朝のひかりをとんでる」ことなどを「無声慟哭」六篇で書き上げた。その後になめられている「オホーツク挽歌」四篇は、死んだ妹を探

しに銀河鉄道に乗るように青森、北海道、樺太まで妹の魂と対話しながら旅をするのだ。鎮魂詩とは、愛する者の死が信じられずに魂の対話をし続けることだろう。多くの詩を志すものたちは、きっとこのような鎮魂詩をどこかできっと書いているのかも知れない。そのような二十世紀に生き、また二十一世紀に生き続けている詩人たちが、どうしても自分がこの世に限り書きかざるを得なかった鎮魂詩篇を一冊の詩選集にまとめたいと願っている。

二〇〇〇年に亡くなった鳴海英吉さんは、シベリア抑留から帰国する時に、酷寒の地で死亡した二〇〇名の固有名を瓶の底に隠して検問をすり抜けたと言う。鳴海さんにとって戦後詩の発刊は、固有名を持った存在の無念な思いを詩に刻むことだつたらう。鳴海さんが倒れた時に最後に詩にしたいと語ったことは、中国戦線で顔を半分吹き飛ばされた若い乙女を中国人達が花を顔に埋めこんで葬っていることだつた。二十二、三歳だつた鳴海さんが生涯問うていたことはこの戦場での他国の民衆の痛みであり、また戦地と抑留地で死んだ戦友達であつた。二〇〇八年に亡くなった浜田知章さんは、詩は他者のために書くべきだ、と詩論を繰り返し語っていた。他者とは生きている他者であると同時に、自分に影響を与えた死者たちをも意味していた。浜田さんは戦争体験から被爆者や空爆の犠牲者、朝鮮半島の人たち、中国などアジアの民衆、そんな他者の視線を日本の詩人が内部に深く抱え込まなければならぬと考えていた。そして被爆していない詩人こそが、アジアの民衆の視点を持ちながら広島・長崎の悲劇を風化させないために、原爆詩を書き世界へ発信すべきだと提唱した。

それらの結実が二〇〇七年八月六日に刊行された『原爆詩一八一人集』だつた。広島・長崎で一九四五年に亡くなった二十二万五千人の被爆者たちの悲劇を一八一人の詩人達が語り継いできた。広島・長崎を含め一八〇都市への空襲・空爆で少なくとも五十万人が亡くなったと言われている。東京大空襲など一八〇都市への空爆で、二十八万人もの命が亡くなった悲劇を風化させないための『大空襲三二〇人詩集』が多くの詩人の支援のもとに二〇〇九年三月十日に結実した。けれども日本人の十五年戦での死者は三二〇万人であると言われる。残りの二六〇万人の軍人と民間人は、中国戦線・満州の地や東南アジア、シベリア抑留、太平洋諸島、沖縄諸島、また対馬丸などの疎開船などで悲劇的な死を迎えた。日本の加害者の側面を忘れてはならないし、また戦争で亡くなった軍人と民間人を慰霊する心は決して無くなることはありえない。その意味では国家間が作り出した憎しみを超えて、鎮魂詩においては他国の民衆をも自国の家族のように慰霊する精神性こそが求められることなのだろう。

今回公募する鎮魂詩は二十世紀・二十一世紀の戦争の犠牲者たちを慰霊することはもちろんだ。さらに家族の様々な死、病死、過労死、自殺、交通事故、飛行機事故、また阪神・淡路大震災のような天変地異での死者、さらに家族同然のペット

や里山の動植物の死も含め、それらの地上の死者たちの魂を慰霊することを目的とした詩群を編集したいと考えている。万葉集で挽歌は相聞歌、雑歌と共に三大部立ての一つで大きな位置を占めていた。挽歌で名高いのは柿本人麻呂が持統天皇の命を受けて死んだ皇子たちを悼んだ長詩や返歌であるが、他者のために書いた叙事的な鎮魂詩といえるかも知れない。それ以外に妻の死を悼んで書いた「泣血哀働の歌」があるが、この愛する妻を失った哀切の思いは現代人の心にも届いてくるだろう。また現代詩の発端だとも私は考えているが、与謝蕪村が一七四五年ぐらいに書いたといわれる「北寿老仙をいたむ」は、敬愛する俳人を悼んだ鎮魂詩である。鎮魂詩の伝統には、柿本人麻呂や与謝蕪村そして宮沢賢治などが先駆者として存在している。「原爆詩集」の峠三吉や『炎える母』の宗左近など原爆詩や空襲詩もまた広い意味では鎮魂詩に含まれるのだと私は考えてみたくなる。その意味では戦争責任を背負った戦後詩の最も根源的なテーマの一つであることは明らかである。それから朝鮮戦争、ベトナム戦争、コンボ紛争、湾岸戦争、いまでも続くアフガン紛争、イラク戦争やパレスチナ紛争などの第二次世界大戦以後の戦死者たちを悼む詩篇も収録したいと願っている。多くの詩人の魂の奥底から搾り出された鎮魂詩を収録したいと考えている。(鈴木比佐雄記)

このような刊行趣旨書で全国の詩人たちに呼びかけた。当初の構想では九章程度に分類する予定であったが、最終的には内容を読みやすくすることや、集った詩篇の鎮魂する対象によって、二十一章に分類させてもらった。また四〇〇人の予定であったが、どうしても入れたい詩人たちの詩篇があり、最終的には「死者を偲ぶ」という意味を込めて四〇四人で全ての原稿を確定した。この刊行趣意書よって四〇四人もの詩篇が集まったことは、奇跡のような思いもあるが、編集過程では、もともとたくさんの鎮魂詩の候補があり、時代や世代や男女を問わずに、多くの詩人の詩篇の中で鎮魂詩は、誰もが書いている普遍的なテーマであることを痛感させられた。それは詩人が世界の中で出合い相互に影響を与え合った宿命的な他者が一方的に不在になってしまった瞬間から始まる何かなのだらう。不在になっても決して不在ではない。愛する他者との無限の対話が鎮魂詩の原点なのかも知れない。生きているものは必ず死ぬ。しかし宿命的に関係した者たちの心の中に他者は住み続ける。その他者への鎮魂の思いや他者を偲び続ける精神の働きが鎮魂詩を生み出し続けるのだらう。詩人たちは死者達によって人一倍に生かされている存在であるのかも知れない。当初の抱いていた編集の構想とまた現実的に集ってきた詩篇をどのように編集したについて述べてみたい。

3

第一章「鎮魂詩の先駆者」(十三人、十八篇)は当初の構想どおり、八世紀初め頃に柿本人麻呂が妻に捧げた挽歌から始まった。この挽歌の抱えている意味は、鎮魂詩が悲しみをこらえるために止むに止まらず書かれたものであることを告げている。二番目の与謝蕪村の「北寿老仙をいたむ」は敬愛する俳人への鎮魂、宮沢賢治の「オホーツク挽歌」「永訣の朝」は妹トシ子への鎮魂、高村光太郎の「レモン哀歌」「亡き人に」は妻への鎮魂詩では最も有名だろう。萩原朔太郎と草野心平は蛙を通して命の鎮魂を記した。朔太郎のアルコール中毒の死者を直視する視線はそうせざるを得なかった人間存在の悲しみを浮き彫りにしている。白鳥省吾の「耕地を失ふ日」や兵士であった竹内浩三の「骨をうたう」では国家によって戦死させられた死者への鎮魂を記している。小熊秀雄のマヤコフスキーを悼む詩なども国境を越えて詩人が詩的精神を対話し引き継いでいく典型的な他者への鎮魂詩だらう。「平家物語」や松尾芭蕉の『おくのほそ道 平泉』も収録する可能性もあったが、今回は割愛した。

第二章「日清・日露戦争、シベリア出兵、先住民アイヌ、中国・台湾・朝鮮独立闘争、強制連行など」(十六人、一九篇)には、アジア太平洋戦争(十五年戦争)以前の十九世紀・二十世紀初頭の鎮魂詩や他国の民衆の視点に立った鎮魂詩が集まった。鳴海英吉はシベリア抑留者でシベリアは鳴海英吉の表記では「シベリヤ」であり「墓」はその通りになっている。抑留地でロシア人から聞いたシベリア出兵に関して記した「墓」は、日本の軍隊がこの当時から玉砕を兵士たちに強要していたことを明らかにしている。日露戦争について朝倉宏哉は、日本人とロシア人の双方の兵たちを悼みながらも、中国の覇権を争った国家の在り方の不合理や不条理を告発している。日本人によって侵略され続けた「先住民アイヌ」を悼んだささきひろしの詩、朝鮮併合を批判し伊藤博文を暗殺した安重根を悼み碑にした日本人憲兵がいたことを記している相澤史郎の詩。関東大震災の際に引き起こされた、朝鮮人のことを悼んだ石川逸子の「あなたに」や、大震災のドサグサの中で憲兵によって殺された大杉栄・野枝のことを直原弘道は記した。また吉村伊紅美の「消えない名前」、築山多門の「夕暮れどき」は、日清・日露戦争の墓碑から戦死者を悼み、また田澤ちよこの「西茂森禅林の台地」は陸奥湾に漂着したロシア兵の墓石に触れて日露の兵士を悼んでいる。西岡寿美子の「北へ傾いて」は、シンガポール墓地に眠る「からゆきさん」(日本人娼婦)たちを鎮魂した詩篇。斉藤志の「葬列」は、戦前の朝鮮人の葬列風景を通して朝鮮人の死者への哀切な想いや日本の戦争に巻き

込まれて死んでいった朝鮮人の学徒出陣した若者たちを悼んだ詩だ。岡隆夫の「道に逆らい」は、日本人が朝鮮半島から多くの文物の恩恵を受けてきたにもかかわらず、豊臣秀吉の侵略を認めてしまった日本列島こそが、「鬼ヶ島」と日本人に突きつける詩だ。佐藤恵子の「如意寺の木札」と杉本一男の「廃校に佇む人々」は強制連行され過酷な労働で亡くなった中国人たちを慰霊している。また楊原泰子の「奇跡の詩集」は、ハンブルで詩を書き日本人憲兵に殺された尹東柱のことを「良心の声」として記したものだ。

第三章「アジア太平洋戦争（十五年戦争）戦死・戦場死」には、十五年戦争の中でも、空襲・空爆・原爆・沖繩戦・太平洋諸島・シベリア・中国・台湾など以外の戦死・戦場死の詩篇を集めた。この章には「黒羽英二、壺井繁治、皆木信昭、未津きみ、千葉龍、井上庚、結城文、平野秀哉、今川洋、谷崎真澄、矢口以文、岩崎和子、名古きよえ、南邦和、鳥巢郁美、井上嘉明、蒼わたる、斉藤久夫、ゆきななすみお、福田明、高典子、栗原滯子、真尾倍弘」の二十三人の二十七篇が収録されている。冒頭には、黒羽英二の「コタバル」を置いた。太平洋戦争の開始は真珠湾攻撃で始まったと言われているが、ほぼ同時にタイ国境のコタバルの浜辺でイギリス軍との戦闘が開始された。当時十歳だった黒羽英二がその戦闘での死傷者九〇〇名を慰霊した詩だ。最後の中国戦線を経験した真尾倍弘の「秋風」は、兵士達の非情な現実を切り取り、その痛ましさが増し上げてくる。

第四章「アジア太平洋戦争（十五年戦争）太平洋諸島・フィリピン・ニューギニア・海没」には、「濱口國雄、山下静男、小林憲子、大原勝人、坂東寿子、黛元男、村田正夫、工藤優子、山本倫子、西田彩子、富田和夫、坂本法子、鈴木豊志夫、吉田博子、石下典子」の十五人の十七篇が収録されている。この章は濱口國雄の三篇の詩から始まる。濱口國雄は、中国戦線に加担したという、中国民衆に対しての戦争責任を自らに問いつけただけでなく、フィリピン・ニューギニアで補給もなく餓死や病死していった戦友のことも生涯にわたり鎮魂し続けた。この章の死者たちは、いまだに島々や海底にお骨が晒されていて、戦争を引き起こした責任を問いつけている。

第五章「アジア太平洋戦争（十五年戦争）空襲・空爆」には、「宗左近、田中清光、石垣りん、北野一子、小野恵美子、山本龍生、北村愛子、中原澄子、岡山晴彦、稲木信夫、三方克、荒井愛子、村上佳子、宗美津子、小柳玲子」の十五人二十一篇が収録された。この章は二〇〇九年三月十日に刊行した『大空襲三二〇人詩集』とテーマは重なるが、その詩選集には掲載できなかった空襲・空爆の詩篇が選ばれ集ってきた。今回も東京大空襲の経験者である宗左近の『炎える母』からと同じく体験者の田中清光の『東京大空襲の夜』や小柳玲子の『小さな叔母』などを収録した。無差別大量殺戮された大空襲下で逃げ惑う人々の悲劇を決して忘れてはならないことを語り続けている。

第六章「アジア太平洋戦争（十五年戦争）原爆・広島」には「原民喜、峠三吉、栗原貞子、橋爪文、山岡和範、増岡敏和、上田由美子、水谷なりこ、松田利幸、柴田三吉、上野都、日高のぼる、北畑正人、広瀬弓、斎藤紘二、高橋英男」の十六人の二十一篇が収録された。この章には、二〇〇七年八月六日に刊行された『原爆詩一八一人集』に入っている詩人も多いが、その中に収め切れなかった詩篇や新たに参加した詩人も収録した。原民喜、峠三吉、栗原貞子などの初期の原爆詩運動の歴史に残った詩人はもちろん収録したが、十四歳で被爆した橋爪文の「校庭」「原爆忌」の実相を伝える詩篇も今回は収録することができた。

第七章「アジア太平洋戦争（十五年戦争）原爆・長崎」には「山田かん、河邨文一郎、池山吉彬、伊藤一郎、青木はるみ、志田静枝、江島その美、デイヴィッド・クリーガー」の八人の十一篇が収録された。この章には二〇〇三年に亡くなった被爆者であった山田かんの「アーミーマップ」「覚えている」を冒頭に置いた。また米国人でありながら、初めて本格的な原爆詩集『神の涙―広島・長崎 国境を越えて』を二〇一〇年八月六日に発行するデイヴィッド・クリーガーの「死の存在と化す」「空に響け」「長崎の鐘」の三篇も収録した。私はデイヴィッド・クリーガーの背後に心ある米国人の人類的な立場に立った「良心の呼び声」を聴き取ることができると考えている。

第八章「アジア太平洋戦争（十五年戦争）特攻・沖繩戦・戦艦大和など」には「宮静枝、日高てる、茂山忠茂、鮑浦敏、森徳治、坂田トヨ子、山本衛、石塚昌男、佐藤勝太、高田太郎、河村信子、佐久間隆史、宮城松隆、森三紗、草倉哲夫、水崎野里子、下前幸一、星野由美子、岸本嘉名男、小村忍」の二十人の二十九篇を収録した。この章は宮静枝の「特攻花」「十字の喪章」などの短詩六篇から始まる。特攻兵士たちを生み出し、彼らを死に追いやった日本人の負の精神構造を直視する詩篇が収録されている。また沖繩戦や戦艦大和の悲劇も多くの詩人たちは書き残そうと試みている。

第九章「アジア太平洋戦争（十五年戦争）シベリア・中国・台湾・ノモンハン」には「鳴海英吉、大崎二郎、和田文雄、猪野睦、なんばみちこ、伊藤勝行、宮崎清、金野清人、井上尚美、青柳晶子、瀬野とし、福田操恵、山岸哲夫、みもとけいこ、秋吉久紀夫、久宗睦子」の十六人の二十三篇が収録されている。この章には鳴海英吉の『定本 ナホトカ集結地にて』の「雪（4）（7）」が冒頭に置かれた。鳴海英吉はシベリアに抑留された下級兵士の視線で多くの戦友の死を二〇五篇の組詩にまとめたが、その中でも絶唱の詩篇だ。同じ抑留者の石原吉郎の詩「デメトリアーデは死んだが」も収録した。今年の二〇一〇年によく「シベリア特措法」が参議院、衆議院で通過されたが、鳴海英吉などシベリアから帰還した六十万人の大半はすでにこの世にはいないのだ。

第十章「アジア太平洋戦争（十五年戦争）世界大戦後からイラク戦争、アフガン戦争まで、及び現代文明」には、「馮至（フオンヂー）、浜田知章、村松武司、具常、朴山雲、福田万里子、高見順、御庄博実、郡山直、日下新介、小森香子、高良留美子、埋田昇二、テレシシカ・ペレイラ、麦朝夫、磐城葦彦、青木みつお、原圭治、浅井薫、赤山勇、高橋絹代、小西和子、ワシオ・トシヒコ、西山正一郎、蔭山辰子、吉川伸幸、三井庄二、チェイス・ピアサス、サイナン・アントン、ヒェシン・リム、奥主榮」の三十一人の三十六篇が収録された。この章には、世界大戦後の中国内戦の悲劇を記した馮至（フオンヂー）の詩「招魂」や朝鮮戦争の悲劇を書き記した浜田知章の「朝鮮の少女」などを収録し、現在のアフガン戦争まで続く戦争に巻き込まれて死んだ死者たちの鎮魂を記した詩篇を収録した。

第十一章「友人・恩師」には、「錦米次郎、有馬敲、藤原定、下村和子、こたきこなみ、田中作子、芳賀章内、山形一至、和田攻、丸山由美子、門田照子、植木信子、石峰意佐雄、橋本由紀子、上手幸、青柳俊哉、片岡伸、山口賀代子」の十八人の十八篇が収録された。この章には、例えば錦米次郎、藤原定、有馬敲たちの生涯にわたり交流した友人や恩師を惜しむ詩篇が収録されている。他の詩篇も共に生き相互影響を与え合った存在を書くことは、どこか苦渋に満ちているが、そのことを記さなければ一歩も前に進めないような気迫が感じられた。また亡くなった友人・恩師が決して詩人の心から消えることのないほど棲み付いていることを痛感させられる。

第十二章「他者・祖霊」には、「永瀬清子、嵯峨信之、村上昭夫、呉世榮、朴龍喆、犬塚堯、丸山創、秋田高敏、清水榮一、中津攸子、香山雅代、柳生じゅん子、岡村直子、大西久代、三浦幹夫、関中子、ごしまたま、新井豊吉、浅山泰美、寺田美由記、北原千代、宇宿一成、伊藤眞司、植田文隆」の二十四人の二十九篇が収録された。この章には、「友人・恩師」に収まりきれない、憧れたり、敬愛したり、時代の苦悩を背負った強烈な存在者の喪失を鎮魂する詩篇が収められている。中でも永瀬清子の「あけがたにくる人よ」や嵯峨信之の「鎮魂歌」は名作だ。はるか古代のミイラであれ、民族の祖霊や、たとえ死刑囚であっても詩人の関心は広く深いことをこの章の詩篇が明らかにしている。

第十三章「詩人・アーティスト」には、「更科源蔵、三好達治、福中都生子、米田榮作、新川和江、金子秀夫、吉川仁、武田弘子、津坂治男、碓杏子、岡崎純、大井康暢、小野十三郎、以倉紘平、金光林、李承淳、杉谷昭人、河野俊一、片岡文雄、若松丈太郎、佐藤文夫、山本龍生、川村慶子、河上鴨、中原秀雪、照井良平、都月次郎、岡崎喜代子、ヴァレリー・アフナシエフ、村松美和子、三島久美子」には、三十一人の三十七篇が収録された。更科源蔵が魯迅へ、小野十三郎が金子光晴へ、新川和江が西条八十へなど、詩人たちが敬愛する詩人やアーティストたちの死によって、自分だけに手渡されたものを多くの人に知って欲しいという思いを感じる。詩人の精神性はこのように書物からだけでなく、詩人たちの肉声から直接届けられたのかもしれない。その肉声は手渡された詩人の内側に棲み付き新しい命となって、新しい詩作を指させるのかもしれない。その固有な存在こそが詩であったという詩人も多くいるのだろう。

第十四章「家族・母」には「金丸榊一、中村藤一郎、村田辰夫、島田陽子、秋村宏、上村弘子、大河原巖、岡三沙子、横田英子、池田瑛子、山崎佐喜治、星野由美子、内藤喜美子、岩崎ゆきひろ、荒波剛、片山ふく子、藤谷恵一郎、森田和美、貝塚津音魚、豊岡史朗、佐々木洋一、斗沢テルオ」の二十二人の三十七篇が収録された。第十五章「家族・父」には、「結城文、岸本マチ子、国井世津子、宮田登美子、吉野重雄、石村柳三、方喰あい子、山本泰生、森崎昭生、田尻文子、武西良和、館路子、小林稔、大西久代、こまつかん、崔龍源、山本聖子、鈴木悦子、畑中暁来雄、壺阪輝代」の二十人の二十一篇が収録される。当初「家族・父母」として同じ章にするはずだったが、多くの詩篇が集まり別々にした。単純なことだが一人ひとりの父や母がいて、その固有の存在や生き方は子に偲ぶしかすべはない。父母を想起することは、父母の真の願いとは何であったかを探ることなのだろうか。父母を書き残そうとしている詩人たちは、無償の父母の愛にむせかえり、自分をこのように誕生させてく

れた感謝を様々な手法で告げている。

第十六章「家族 夫・妻」には、「大島博光、桜井哲夫、丸山真由美、田村のり子、吉永素乃、外村文象、曾根ヨシ、長津功三良、増田幸太郎、田上悦子、井上哲士、三尾和子、香野広一、榊原敬子、宮内洋子、うおずみ千尋、小川英晴」の十七人の二十五篇が収録された。長年連れ添った夫婦のどちらかが、亡くなった時に、残されたものはどのような心境になるのだろうか。それは決して同じではありえないが、死んでも夫婦の絆は続いている詩篇が多いとも言える。また生きていくうちには連れ合いが空気のようになっていたが、死んでからは空気が足りないような悲しみが込み上げてくる詩篇も多い。

第十七章「家族 子ども・兄弟・祖父母・親族」には、「小松弘愛、中桐美和子、塚本月江、鈴木ふじ子、河野洋子、市川つた、堀内利美、大塚史朗、山田朝子、星野元一、宇都宮英子、水野浩子、徳沢愛子、前原正治、細野幸子、堀江泰壽、井野口慧子、平原比呂子、酒井力、竹内美智代、高山利三郎、柳原省三、江口節、清水美智子、大山真善美、武藤ゆかり、石川早苗、苗村吉昭、佐相憲一、亜久津歩、白糸雅樹、安永圭子、林木林」の三十三人の三十九篇が収録された。父母や夫婦以外の親族のことを鎮魂した詩篇を集めた。子どもや兄弟・祖父母を亡くした詩篇は哀切極まりないが、悲しみをこらえて生き続けていることが、いつしか詩作することにつながっていく。家族への鎮魂の思いこそが、詩人が詩を書くきっかけになる場合がある。宮沢賢治などは、妹への兄弟愛が詩の中に満ちていて、詩を書く発端になってきたことは間違いないことだろう。

第十八章「公害、原発事故、地震・津波など」には、「黒田三郎、松本一哉、山内龍、浅見洋子、白川淑、市川紀久子、たかとう匡子、麻生直子、山佐木進、鈴木文子、本多照幸、鈴木比佐雄、高岡力」の十三人の十三篇が収録された。この章には現代文明が生み出した科学技術が人間を便利させたが、その弊害として人間や自然を破壊させる恐るべき側面を持っていることを様々な観点から詩作をしている詩人たちがいる。阪神淡路大震災などの天変地異による悲劇もまた、忘れてはならない大きなテーマだ。

第十九章「自殺・過労死・虐待死・無縁死、など」には、「寺門仁、ベルトルト・プレヒト、くにさだきみ、桃谷容子、弓田弓子、斎藤省吾、秋山泰則、赤木比佐江、吉田美和子、森田海徑子、鈴木比佐雄、一瀉千里、中園直樹、中村純、亜久津歩」の十五人の十七篇が収録されている。寺門仁は江戸時代の遊郭で簀巻きにされて殺された遊女の死を悼んでいる。プレヒトの子殺しの女を書いた詩は、いま読んでも決して古びてはいない。この章の鎮魂詩は、時代の苦悩を背負いながらこれから、ぞくぞくと書かれていくのではないだろうか。

第二十章「地球の生きものたち 哺乳類・昆虫・鳥・魚・甲殻類、環形動物、絶滅恐竜、樹木植物など」には、「丸山薫、木島始、金子みすず、村野四郎、木下夕爾、高橋一仁、菊田守、真田かずこ、豊福みどり、大石規子、林洋子、香咲萌、木村淳子、関子英雄、若宮明彦、伊藤眞理子、山之内猿、蔵原伸二郎、会田綱雄、和田杏子、山本十四尾、豊原清明、酒木裕次郎、佐相憲一、腰原哲朗」の二十五人の二十九篇が収録された。詩人たちは人間を鎮魂するだけでなく、地球の生きものたちの鎮魂詩を書いてきた。

第二十一章「場所・建物・空間及び時間・神々・地球」には、「比留間一成、黒田えみ、野仲美弥子、真田かずこ、新井啓子、丸山乃里子、なべくらますみ、井奥行彦、相良蒼生夫、越路美代子、近藤麻耶、金井雄二、西村啓子、加藤礁、はなすみまこと、坂上清、杉浦鷹男、司由衣、金田久璋、働淳、嵯峨京子、相澤史郎、白河左江子」の二十三人の二十三篇が収録されている。この章の鎮魂詩は、今までの二十章のどこにも該当しないものだが、そのはみ出して行くスケールが魅力的な鎮魂詩だ。比留間一成の人魚への鎮魂、相澤史郎の様々な神への鎮魂、白河左江子の地球への鎮魂など想像力を駆使しながら、人間が欲望によって見失ってきた自然の中に潜む神々への畏敬や恐れを取り戻そうと試みているように思われる。

その試みは「良心の呼び声」に耳を澄ましていかのように私には思われる。四〇四人の中から一人でもその声を聞いて下されば、これほど嬉しいことはない。終戦六十五周年、日韓併合一〇〇年の年にこの詩選集が多く詩人たちの力の結集で実現できたことも嬉しく思っている。日頃詩を読むチャンスがない方々にこの詩選集を捧げたい。詩人たちの鎮魂の思いや「良心の呼び声」に呼応して下されば幸いである。

装画にはシベリア抑留者であり故人の香月泰男さんの絵画を使用させて頂いた。その絵画を快く活用させて頂いた奥様の香月婦美子氏と山口県立美術館の関係者には心よりお礼申し上げます。また、帯文には小説家で東京大空襲・戦災資料センター館長の早乙女勝元氏に寄せて頂いたことは、心より感謝申し上げます。

一 鎮魂

1 鎮魂のこと

鎮魂は古くから、たましずめ（魂鎮め）あるいは、みたましずめ（御魂鎮め）といいならわされてきた。しかし、敗戦後の植民地風の片仮名読みが跋扈し当り前のごとくになっていく。

祀ることは重々しくまた儀式張れば神として祀ることである。神として祀ることはごく限られていた。しかもそれは神道という宗教に依拠されるものでなくてはならないとされてきた。ここで、祀り、祀られるモノに祈ることは旧来からの天神地祇（天つ神。すべての神々）を祀るというわけでも、その神々の神階、陞叙などで区分けするものでもない。いま魂鎮めの祭りを徒手をもって行おうとしている。ここで祀ろうとする「たまま」は「霊」であり、「魂」たましいで霊魂を一緒にして祭祀する。

魂が人の体で精神活動をし霊が死んだ人のたましいであるとし「たましいは知識ではなく、力量・才能で……仿いでいる力ということになる。沖繩のぶたましぬむん（不魂之者）^{ブタマシノモノ}というの器量のないもの、働きのないもの」としている（折口信夫）。いまここに集って鎮魂の祈りをしようとする人は生きている人たちであり、祀らるモノは死んだ人たちであり、いきものたちの霊である。

みたましずめは死んだモノの霊に祈ることであり、あるいは話しかけ語り合えることである。献詩する生者たちは祈ることによって精神の活動の継続とその価値をたかめ、詩（歌）として肉体のうちに増加させ生霊が、昨日までも一緒に暮らしていたであろう死霊といきもの、「尊敬、もしくは追慕・同情を祈りとして捧げ」（柳田国男）るのである。しかも「人はなぜ愛する人が亡くなった後に、その人のことを詩に書き記したいと思うのか」（趣意書）と問い、この公墓は「二十世紀・二十一世紀の戦争の犠牲者たちを慰霊することはもちろん……」の指摘を果し、「家族の様々な死と、天変地異での死

者、さらに家族同然の愛玩動物、近くの野草、昆虫、鳥、小動物の死を含め、これらの地上の死者たちの魂を慰霊する」ため当然、人間の食用としてただその死に向ってわが生命を飼育される家畜たちのための詩篇を集め編むことを意図している。そして提供され集められた。

2 献詩のこと

この献詩は死者への鎮魂であるから作者は

- (1) 懸命に思い考え、誠意と辛苦にこめて、一行一字を綴ったことであろう。そのとき自分の精神を統一し集中した。詩神は易々と降臨してくれるはずのないことを知りつくしている日頃であるからころを傾けてつくられる。
- (2) これは相対する身罷った人やいきものタマ、霊魂を迎え入れる、あるいは通じあえることを可能としようとする。思慕の念というが、思考や回想はともに苦痛を伴ってあらわれる。思慕、惜慕のなかの葛藤といえるものでただその場の思いつきとしてしまうことはできないものである。
- (3) やがて心情が懐情に転じてこのことのみとまりができると非には理を、偽ものには真実をもって思慕へ強く作動し、一層の結合を果すこととなる。
- (4) 今を生きている自我が現世と冥幽界とを往来し、生きていく精神とタマとなった精神がともに鎮魂、みたましずめする。それが鎮魂の詩であり挽歌となる。

そしてこの鎮魂詩集となったのである。古来からの詩歌はかならず風俗習慣を裏づけとして作成されてきた。この一書が現在、現代の民俗と文学へ寄与することで、作者と編者の本来の意志は伝承されることとなり、そして伝えられてきた。のりど、ほごど、よごど（祝詞としての寿詞、吉言）として後世に飾られる詩文学を形づくるものとなる。

二 祈る

1 「祈った人」

朝、五、六人の村人が、屋根の上で狂人のように天に祈っていた光景は、大自然に対しての彼らの真摯な表現だったのだ。鐘を打ち、幣帛を捧げ、神水を天に、そして眩き祈っていたのは、畏れを知っている人間の姿だったのだ。

真尾倍弘

真尾倍弘の『遺稿 戦争抄』二十九篇の中からの抜粋である。

この「祈った人」の前後と詩集全体の状況については割愛することとしたが、真尾倍弘の没後、悦子夫人が書架の遺品のなかから原稿を発見し所属していた「鮫の会」が私家本としたものである。真尾が戦場で、彼我闘いの死地のなかで体験した、させられた理不尽の一端である。このときの彼は酒好きの真尾でも貧乏詩人の、八方破れの倍弘でもなかった。一人の人間としての習俗を見つめる埼玉県秩父市に生まれ育った真尾倍弘であった。

祈っている人たち、村人は戦争に巻きこまれた中国の農村の人たちであろう。そこに「のどかな邑落。甘ずっぱい杏子の花が盛りだった。……うす暗い部屋の中、瀕死の病人は私を瞳め、何かを言いたそうにしたがぼんやりと眼を閉じた。」祈られている人がいた。

真尾は必死の形相の老人に遇った。そこで見つめたものは、大自然に対して祈っている村人であり、その中で祈りに加った真尾の自分自身を見る人間の姿である。祈るとはこういう状況で本当の姿を現すのであろう。異国の戦場で祈る村人の姿と老爺の生死の境に鎮魂の姿を見つめ、戦争と戦場の論理の詭弁と許すことのない人間真尾倍弘を確認させてくれる。

祈ることは追慕の心象にはじまる。心象は敬慕、愛慕、惜慕、懷慕が重なり合って、時には混り合って鎮魂の心情作用をつくりだす。しかし理不尽な死に対してもっとも純一明快な同情がつつまれて存在する。市井の一説に同情より理解といわれるが理解なくしては同情の温かさは真のものとはならないであろう。この状況はいま生きている人たちが死別した人とあらゆるいきものへの鎮魂の祈りを捧げなくてはという心持ちにおかれるすべてを抱擁する。真尾が見つめた生死の境にいる老人、そしてそれを見る近親者、村人と武器を持った異国人。おそらく両者に死後を期待し任せる宗教的な接点はない。しかし祈っている人と見つめる真尾は「寥々の風というには程遠い、言い知れぬ風が私の中を吹き抜け、また吹き過ぎていった。」と最終行に記した。これが別れ、離別、死別のときの「魂おくり」のことばであり「魂迎え」へとつながっており懷慕、愛慕の基底となる。ここから現世と冥界との境界がつくられるのであろう。

死者は沈静瞑目している。生者である真尾は魂送りの雰囲気にとりかこまれている。生者が生きているタマとして活動をするそのときの祈りはまた縁者への祈りとして瞑想し、黙禱をする。これは生者が死者に対してする鎮魂のあらわれであり、これは生者自身の鎮魂たましじめなのである。宗教的な接点がない、救いを宗教に求めない、頼ることをしないから精神に介入されることはなく、ただ祈るだけという心境であったといえよう。寥々とした風が吹き抜けたとき彼は老病人が甦るようにと祈る姿を見つけたのであろう。そのことへの畏れは「永遠の少年の心を失わず／戦火に汚れず／夜は寸分たがえず／言葉を超えた言葉を忘れず／不器用な暖かさを絶やさず」と飯島研一が追悼の「鮫」九二号に掲げた「異友への返歌」の一節である。

*真尾倍弘（ましおますひろ・埼玉県秩父市の生まれ。詩集『戦後抄』一九八七、詩集『白日夢』一九八八、『遺稿 戦争抄』二〇〇二、追悼詩誌「鮫」第九二号、二〇〇二冬。）

大河原巖（「鮫」同人）は献詩「猿まわしの猿と猿まわし」と、論考「戦争の記憶と戦後」を追悼号に寄せている。しかしそこには詩のことばのなかに潜め密めかしている。また多くの鎮魂の詩は、対象を明確にしても詩のことばに託すことに躊躇しことばを進んでいる。それはもうこれ以上は心情が許してくれない死者への思いがつのりとめ処をなくしているからであろう。祈ることばを失い、何を祈ればよい、祈ることで迎えられるタマに何を告げればよいのか、祈ることばが消え、しかし祈らねばならないわたくし^がが存在している。あるいはこのことばにならない情念が鎮魂の詩なのであろう。

2 祀る

鎮魂の行事は魂送り、魂迎えなどを祭りとする習慣で親から子どもたちを通じて習俗風習となってきた。村祭は社盆棚に迎えられた祀られたタマを拝み祀ることにはじまる。祈りは継続され生き残った者と死者との間を往き来する。生者は死者への追慕の場所としてまず墓所に葬る。やがて家々に何がしかの方法で祀る位置を定め朝とか夕べとかに祈る。それは限られた「家」といういちばん親密な生者と死者の間で行われる追慕であり惜慕となる接近である。一方特定の「家」を離れて祀るところは霊屋あるいは「たまや」または廟ともされた宮、社として祀る場所となる。

これらはいずれも霊魂として祭祀するモノへの尊敬と惜慕に始まり、やがて人々が集り敬慕と感謝にかわってゆく。堂宇の広さ、大きさ、高さなどにかかわらず土、土地の生産力を祀ったものでその上、その土地に生き育てられてきた人たちが

産土と称えて感謝し豊饒を願って親しみをこめて集り祭りするところである。社は土と祭壇を示し、土地のカミ(神)を祭祀する。ウプスナは産むす土地のことで産霊と呼んで祭りの行事としてきたもので宗教ではないとされている。

国の光を見ることを観光とすれば大鳥居も空をつく建造物も無い時代、私たちの祖先である原始の時代人たちが時代、時代の文明、文化の創造にその時代の叡智を燃やし穴居の生活をした。原始人が原始の生活することに何の不思議もない。それは原始人即文明人ということなのである。原始の人たちが原始のくらしを真面目に誠意だけが原始集団生活を成り立たせたであろう。すべてのモノを祀り、祭っては集うところが社であったのである。

社あるいは御霊屋はかつて共に住み喜怒と哀楽を一緒して過してきた人たちの遺骨を安置し常日頃に祈ることは、宗教とか道徳とかでの特段の規範を必要としない。生死を分けた暮しの延長である。しかし、社や御霊屋に祀られることのない人たち、祀る人がいない人らの霊魂がさ迷っている。その霊魂に捧げ慰める人やことははないのだろうか。幣帛を捧げ、奉幣するとは仰々しいが、畑で収穫されたもの、庭木に実った果実の初ものを日頃祈っているご先祖様に供え、好きだったねえと語りかける。そこにまた鎮魂の詩があり、ま・ごころが供えられる。

3 祭祀

渡来の宗教がときの権力者によって庇護され、教義が流布される。また、邪教として強く規制された経緯があった。またすすんで宗教に頼り、現世を捨て未来の安泰を祈るとか、あるいは安穩のない暮しを強いられ、貶められた不幸な人たちがいた。一方村落の共同社会組織では小さな集りから、それぞれの村落に社がつくれ氏子、宮座そして祭祀のための組織がつくられた。分社遷址の神社ではその由来と祭神は明らかであるが、多くの氏子たちは祭神の縁起については明確ではない大らかさである。したがって神輿の競り合いにあっても世界を覆すような戦争を起す原因をつくることはない。古来、言挙げしないとはこれを指すのであろう。

社は季節的に祭祀が行われ氏子といわずその地域に住む人たちは参詣する。家々で子供が産れば初参宮をし護符を戴き氏子となる。渡来の宗教者からすれば奇異のことであろう。これは風土の、農耕社会の普通の普段の行事として行われてきたもので学問の社会では片寄った社会構造と呼んでみたものの効用はない。

団地あるいは新開地と呼ばれるムラができる。おおかたは「村」を名乗ることはなく、風景や存在しない植物の名前などを冠して新住民の標識とする。やがて住生活が安定してくると夏秋の祭りがはじまる。当然のごとく社や祭神を安置し敬礼する社もないがなぜか神輿だけは新開地を練り渡御し、町会事務所に還御する。こうしたとき先達となり指揮する人がいるが必ず出生地や前住所の方式をもって行事をとりしきる。それに手の拍ちかた、神輿かつぎの足並み、掛け声、合いの手までが経験的である。祭祀をはじめ民俗の伝習行事には「新開地式」をつくるには時間と由緒が不必要なのであろう。しかし新開地に民俗の縁がないのではなく縁りは山河にあり民俗となって伝えられているものがある。道路がムラの出入口となつて区分けされるように村入りの手続きを経てムラの成員となる。これはまた外来の異文化、宗教についても固有の信仰や祖先への崇拜、村落の共同組織がこれを消化してしまうという。

葬送が火葬となつてから、死者を埋める墓穴を掘る床番はなくなり今ではコンクリートで墓室の防水をする職人が埋葬をしめくくるが、床番には宗旨、宗教などの宗教、信仰はなく、どのような宗教でもこの方法は家並みで床番の順番が廻ってくることに変わりはない。これを村という共同社会の閉鎖性といって片づけられるものではない。社会学とその政策の進歩性が指摘されることになり、祖先の霊を祀り祈る方法としての共同行動という便宜なのである。

死者のタマシイを祀り、祈りそして祭ることは小規模で血縁関係が近くなるほど強く結ばれている。神社の社格とか官幣順位とかはいかにも形式としてつくられたものである。小さいまとまりのときも大きな神社となつても、祭りには祭祀の仲間、儀式の方法、祭りを営む諸掛りの按分持ちなどがとりきめられ習慣となる。祭文による鎮魂も死者の家族、縁者に手向けられる。この祭文は身近な家族、依拠する宗教やその儀式の方法によらないものとし、またはこの方法が霊魂との邂逅をどのように果すか。それは祭文にあらわし、ただ祈るだけとしても、そのことが有縁、無縁という非情への分岐となる。

みたましずめて心を統一し、集中してつくられたこの詩集である。現代詩は難解とされるが、相通ずる思いは時に時空を超えさらに「念ずれば通じ、花のひらく」ともうたわれる。呪術的なあるいは非文明的なこととする向きもあるが鎮魂というそのものが霊魂を招き迎えて慰めようとする行為なのである。

考えなくてはならないことは浮遊する霊魂の存在である。そしてさらに浮遊しかねない人やいきものの死である。たしかに生まれてきたときには両親があった。またその係累がないとも考えられない。なのになぜ浮遊する霊魂があるのか。そしてさらに増えてゆくことに思いめぐらすのは人として自然なことである。

この四〇四人詩集はこれらの原因と対象について、分類され集められ、編成された。一方、あまたの原因、数えきれない、

数えることすらできない人、いきものの霊魂についてである。

死者やいきものを神として祀る慣習は古い時代から多くあった。この風習には「年老いて自然の終りを遂げた人」は祀られない。「遺念余執が死後になお想像され……タタリと称する方式を以て、怒や喜の強い情を表示し得る人が、このあらたかな神として祀られるようになった」（柳田国男）。したがって発祀の儀礼作法はそれぞれ異なることが多い。しかしこの風習も日本古来のものとも近隣国からの伝来であるとか明らかでないといわれている。

カミという言葉は広い意味で用いられ樹木、動物などにも宿り、人の霊が神となって拝み禱われることも当然のことと考えられていた。鎮守の森と神の坐す樹木は異存し共生しているので、明治のころの神社の統合と合併廃社で神社の建物の破壊と樹木の伐り倒しは自然と人の心の荒びをもたらした。（南方熊楠）

昭和五年の新聞記事に「師走なかばの寒い雨の日に、九十五歳になる老人が只一人とほとほと町を歩いていた。警察署に保護した。背に負っていた風呂敷包みには四十五枚の位牌があった。」（柳田国男）九十五歳の旅をさまよう年寄りに、なお、どうしても祭らなければならぬ祖霊があったのである。と記し、さらに、家の永続を願う種族の無言の約束として、多くの場合祖霊は血を分けた子孫らに祭られ供養をうけることを期待し、それが死後の幸福を得られる当然のことと思っていた。死者はいつまでも娑婆に愛情を残し、終始家の者の面倒を見ている。無縁となった霊魂に供養する。それを行わずにいることに霊魂は歎き羨み、間接に家々の幸福を攪き乱し、ゆきとどかないときは化けて出る。

戦争や飢饉の後などにはこの不安は殊に多く、実際、疫病や虫害などの災いが起る。それを慰撫する丁寧な法会が始ったと新聞記事から続いて記されている。

ここに至るには、昭和二年の金融恐慌（三週間のモラトリアム実施）昭和四年十月二十四日の世界恐慌、昭和五年の農業恐慌・農村疲弊、と続き昭和七年臨時議会で匡救対策を講じたとされているが、九十五歳の老人には何らかの救助が行われたのであろうか。

三 まはらのほぎうた

ここに集まった詩はきのう別れた近親者へのものであり、また幾年、幾十年を過ぎた人たち、いきものたちへのもの、また、いつ別れたのかも知らない知ることできないいきものたちに捧げ、告げる誄（いさ）のことばでもある。生前の功德を判断な

どしない別れへのことばはまた残されたもの悲哀のしのびごとの祈りである。

幼くして誄文を書くことができなかつた者も貧しさを賤しいとされ誄を捧げることができなかつた人も魂鎮めする。死別のとき誄文は悲歎に沈む。そこに死の尊厳がある。死の尊厳に対峙し、人間が家畜として飼っていたのだから当然として肉を食う。肉食系だの草食系だのと揶揄にもちいる。さらには飲食店などで水槽から魚をとり出し三枚に捌き、活魚づくりと称し、家族達の子供の前でまた酔客名士に食させ、頭と骨と鱗となった魚を泳がせる。

九州のある肉畜を飼養し、食用加工を実習する若い女生徒たち、また東北のある小学校で半年近く飼ったニワトリを給食に使用した。同じころモンゴルの屠殺場で働く一人の男の成長記録が著述された。

これらが、どのように賛否への意見が開陳されてみても、家畜という動物の生命を断つてその肉を人間が食べることに相違はない。自然界の食物連鎖とする論もあるが人間はその連鎖を中断しつねに最終点に存在する。

大都会東京の都大路を家畜が貨物として運ばれてゆく。ある地点に差しかかると家畜たちはナキ騒ぐ、哭きわめき暴れる。ときに貨物自動車の困いを破って逃げ出す、動物たち、家畜たちに屠場のにおい、死の時間が迫ったことが判り哭き騒ぐのである。これが食物連鎖であるとだけで済まされるものであろうか。食物に感謝し有難がることはこの屠殺場の家畜の犠牲という死の尊厳にせめて鎮魂の詩を手向ける。宮沢賢治が菜食を実行するきっかけは屠場の実際を知ったからである。いくつかの例をあげたがいずれも食物への感謝だけ先だち、家畜動物などのいきものの死の尊厳を説き鎮魂の詩や歌によせる心情にはいささかの不十分さがある。この『鎮魂詩四〇四人集』がつくられ、存在する意義がここにもあるといえる。

ここに集められた四九六篇の詩、精根を尽くされ誓言のことばを、創った四〇四人の方々の作品には死者の生きてきた時間、未来へのおもいが託されている。送られてきたことばとおもいはさらに思索から創造を、そして苦痛から喜びを迸らび出させた。烈しくまた慎ましく、しなやかに作り出された全篇の校正刷りを謹んで読ませて戴いた。

故人へのことばを創り、霊魂に祈り鎮魂めしての交流をはかるために供え飾られる。それは霊魂といまを生きているわが身と仲間たちの暮しと幽冥界とをつなぐことばであり、励ましとなり、ささやかな祝福を祈ることばとしてまた、よい結果がつくられる祝いのことば、ほぎうたとなり、寿詞、よごととなる。

死者の霊魂を鎮めるには生者はつねに、ずっしりと腰をすえ、穏やかに、争いごとなく世の中を整えて暮し、死者の喜びも、無念も生者が心身を整えて齋（い）つくことわりとしてきた。祝うとは彼比よるこびの楽章も悲しみの音階も苦しみの怨嗟の

声も終止譜に書きとめ、鎮めの辞意^{ことば}えがつつましく、決して忘れることのないものとなる。

仏事の三十三年の法要に集まる人たちは死者の何代目かの伴、孫、甥、姪に「こんにちは、おめでとうございます」と挨拶する子孫繁昌の祝いのことばであり、迎えられたタマへの安堵とする。

まだ終っていない。始ったばかりだがこの鎮魂の詩群が平穏な生活、帝力何ぞわれにあらんの憩いの第一歩を踏み出したことへの祝いは許されるであろう。その祀りは今までの残酷な行為にまた今も続く戦争そして無辜の人たちの死についての、詳細で正確な鎮魂の詩篇をさらにまともあげてゆく。「まほら」とはいま在る詩景が抜きんでてすぐれている場所であることを指す「ほ」と接頭の美称「ま」と接尾の美称「ら」を指すことばとして相応しい「まほらのほぎうた」の凝り固まって祝^はぎ、寿詞^{よこご}がこれからの人と、人の世の、国内を浄めてゆくこととなる。この鎮魂詩集を作りあげた鈴木比佐雄氏をはじめ編集者諸氏への感謝のことばとして寄せる。

編者あとがき 1 鎮魂と招魂の畝合いに佇む

山本 十四尾

鎮魂と対するようにして、歴史のなかで時に「静」に、時に「動」にして、しかし今では忘れられたように地方の片隅で
 実事されているのが招魂である。

かつて疎開先で体験させられたことであるが、少年の私が大谷石で造られている大蔵の屋根に登らされた催事。人が死ぬ
 と生き返らせようとして、死者の「衣」を持って屋根、それも高ければ高いほど思いが叶えられるといわれて屋根に立ち
 北に向かつて三度、生き返らせたい人の名を呼ぶのだ。その所作の出来、不出来いかに死者の魂を招きかえすことができ
 るというのが招魂である。少年にとつて死者の「衣」は軽くはない。大声を出してゆったりと乞うように、名を呼ぶ。足元
 は不安定、叫びは腹中を揺れ動かし心が大きに噴出していく。疎開児の美声が木霊となって返ってくる。それがいずれかに
 転生するかも知れないという少年の感受をそのまま受けついで今にある。

さて、このたびの『鎮魂詩四〇四人集』のゲラを読み、第一章「鎮魂詩の先駆者から」から、二十一章「場所・建物・空
 間及び時間・神々・地球」までの収録作品を熟読したとき、私は相当数の詩人の作品に感動をし、作品の世界に魅了されて
 しまった。と同時に、作品の背後にある余白にこそレクイエムの真髓があることを知った。余白にはそれぞれの生者が地殻
 として長い間、あるいは短い時間に生成してきた五味（甘・酸・鹹・苦・辛）や九徳（忠・信・敬・剛・柔。和・固・貞・
 順）。そして最も関心のある九幣（九悪徳といつてよい）、つまり人に勝とうとすること、自分の過失を聞くのを恥じること、
 口達者なこと、聡明をみせびらかすこと、威厳をとりつくろうこと、頑ななこと、へつらうこと、望みが多いこと、恐れい
 じけること、さらにこれらに加えて喜怒哀楽などを読みまることが出来る水準が、鎮魂と招魂の畝合いに佇む私たちを生
 きている者たちが学び得る、鎮魂の真髓、と思えてくるのである。

この観点から、このたびの『鎮魂詩四〇四人集』を味読して来て、私はひとまわり地殻の重玄化をなしたと実感している。
 他に類をみない出版の意義を痛切に感じている。大袈裟な表現を許していただけならば、百万冊の書籍を読む以上に、精
 神の豊饒化、豊饒な地殻化のなかに立っている自分を見出していることを、ここに記しておきたい。

編者あとがき 2 画期的な「鎮魂詩・紙碑」が出来た

長津 功三良

人に会うのが好きで、あちこち出掛けては、随分多くの人と接して来たが、呑んでも、喰っても、何時も「詩」の話しか
 しない人がいた、そしていまも居る。米田栄作、浜田知章、吉川仁、倉橋健一そして鈴木比佐雄などの諸氏である。何時も
 話題は「詩」の事ばかりで、世俗的な話は全くしない。原爆詩の先達米田栄作も、何度自宅訪問して長時間一緒に呑んでも、
 既に高齢であったが、崩れることもなく詩の話しかなかった。浜田知章もそうだった。唾を飛ばしながらでも、勢いのい
 い言葉で常に話題は真剣に詩。私のような世俗まみれの人間は対応に疲れる。詩人という珍しい人種はみんなそうなのだろ
 うか……。

鈴木比佐雄もそんな人間である。蒸気機関車のような直進的推進馬力で、詩の話しかしない。常に信念を持って語り、妥
 協を許さないから、時に、衝突や誤解を招いたりもする。子供のよう純真無垢の人である。

そして、今回も持ち前の馬力と努力でとてもいい仕事をした。「鎮魂詩」の集大成である。広く多くの詩人たちに呼び掛
 け、賛同を得て「鎮魂詩」アンソロジーの定本とも云うべき立派な本が出来上がった。

項目分けも、特色があつて読みやすい。膨大な文献や資料を漁り、また参加者の掲載希望作品を読み、選別し、区分けす
 る作業は大変であつたと思う。最後は体力勝負であつたかも知れない。よくぞ、と思うほど、幅広く声をかけて採録してい
 る。ゲラを受け取って、知らない作品やよく知らない詩人の名前など、確かめながら勉強を始めたところである。簡単には
 読み切れない。面倒がりやの私などは、このような根気のいる仕事には向かないだろう。読むだけで疲れている。呼び掛
 け人に名を連ねたが、実質的な仕事の応援は全くやらなかったもので、誠に申し訳ないと思つている。いろんな機会に、一人
 でも多くの人に読んで頂けるように働きかけていきたい。

中身の充実した、今年の夏の話題の一冊になるであろう。いい仕事である。作品数が多いので、すべてと云うわけにも行
 かないだろうが、英語や仏語など、海外へも代表的な作品の抄訳なども出来れば嬉しい。

詩碑は、その詩人に縁のある場所を定めて建立されるが、このアンソロジーは、持ち運び可能な詩碑であろう。私はこれ
 を、四百余人の鎮魂の想いの凝縮した「鎮魂詩・紙碑」と呼びたい。無人島へ持って行く一冊として、是非お奨めする。